
● 北 陸

響 敏 也

個人のなかで完結しがちな趣味の世界も、ときに世のなかへの影響力を持っている。

作曲家ドヴォルザークが、1日1度は機関車を見ないと気が済まないほどの鉄道趣味だったのは、よく知られている。そうして2015年3月に開業の北陸新幹線1番列車の切符は、なんと発売後25秒で売り切れたという。洋の東西や時代を問わない鉄道趣味の力というべきか。しかし、この場合、鉄道趣味だけでなく、初物への好奇心も手伝っているだろうし、北陸の春の情趣が身近になったことへの反応もあるだろう。その北陸新幹線開業前夜、2014年の音楽界もまた、新幹線前奏曲を奏でつつ、各地で独自の沃野を拓き始めていた。

富山県の芸術文化創造の拠点のひとつ『オーバードホール』は、地域との密接な交流を高い次元で実現している。2014年についていえば、チョン・ミョンフンとアジア・フィルなど話題を呼んだ公演も数あるなかで、これはシリーズ公演だが『富山のミュージズ』を挙げておこう。声楽と器楽を問わず、富山にゆかりの新星たちが、遠来の東京交響楽団と共演する。こういう場合、多くは地元のオケ（アマチュアも含めて）と共演するかたちが主流のようだが、富山では東響との共演。これは東京の最新のスタンダードが、ごく自然に富山に注入される点でも、また富山の逸材が瞬時にして全国区の知名度を獲得するきっかけになる点でも、近い将来の成果が期待できる。

福井県の『ハーモニーホールふくい』もまた、地元とのつながりが豊かな実りを実現している。その絶好の例としては『越しのルビー音楽祭』がある。この風変わりな名前の音楽祭は、福井の名産プチ・トマト『越しのルビー』から採られている。注目すべきは、2014年から本格的に活動を開始した『ディノカルテット』。この弦楽四重奏団は前年に、日本の若手の精鋭が集まり、この『越しのルビー音楽祭』に出演したことから、歴史が始まる。2014年にカルテット名が一般公募されて、現在の『ディノカルテット』に決定している。もちろん福井県と恐竜とのご縁から。このカルテット、先端の音楽を切り拓く姿勢も鮮やかで、新作や珍しい分野との共演など、挑戦的な演奏活動が光る。この鮮烈な企画がある一方で、より深く地元の暮らしに密着したクラシック分野の企画も、丁寧に制作されている。ここからも新たな音楽の芽が吹くだろう。

現在、日本の音楽水準の先端を駆けていると言えるのが、石川県金沢市の『オーケストラ・アンサンブル金沢 (OEK)』と、名前も凛々しく清々しい『石川県立音楽堂』。自国語で誰が読んでも意味が解るホール名は、この国では貴重なのだ。

OEKは定期演奏会の水準でも、あるいは日本全国から欧州までを照準に入れた活動範囲でも、もはや日本を代表する楽団のひとつと呼んでいい。室内管弦楽団として日本で唯一の独創的な歴史は、2014年にも確かな航跡を描いている。たとえば、一般的には映画『アマデウス』の音楽監督と演奏を担当したことでも知られるネヴィル・マリナーが来演している。OEKとの共演は、彼のこれまでの、どの日本公演（アカデミー室内管との公演を含む）より、この90代の巨匠の真の姿を伝えるに相

応しい公演として記憶に刻まれて良い。日本にOEKがあったお蔭とすら言える。

さらに石川・金沢の動きではオペラの積極的な発信だろう。名作、知られざる旧作、様々な視点から、これほどの量と質のオペラを発信した例は、日本では希少だ。戦後しばらくして、大阪から矢継ぎ早に新作オペラが発信された歴史を思わせる。金沢の2014年は1月に千住明作曲『滝の白糸』が初演され、名作シリーズでは『こうもり』があり、2015年には4種のオペラ制作が予定されている。

さらには『ラ・フォルジュルネ (LFJ) 金沢』の市民生活への浸透も、どの都市より成功している。市民生活への密着と、国内外への発信の、幸せな競合がここにある。

これでこそ、新幹線で東京と一直線に結ばれてのち、人と文化の離脱について、過度な心配の必要はないと言える。